郝敬「五声譜」研究序説

富　平　美　波

1．方以智『通雅』が引用する「郝京山譜」

明末・清初の学者方以智（注1）がその著『通雅』の巻五十「切韻声原」（注2）の中で、「郝京山譜」という音韻学書を紹介している。しかしその記述は、下記のごとくたいへん簡潔なもので、単に同譜の十二の韻目を列しているに過ぎない。

方以智『通雅』五十「切韻声原」
「韻攷」の条
「　郝京山譜　十二韻
同　遅　危　虞　孩　真　田　調　摩　邪　強　求」（注3）

なお、方以智の『通雅』には、上記の他に、同譜が十二韻を分かっている事実を指摘した次のような叙述も見られる。

『通雅』五十「切韻声原」
「旋韻図説」の条
「郝京山亦分十二，而都尤則鄉言也，然鄉言亦古言也。」

『通雅』巻首「小学大略」
「郝氏但刪為十二韻。」

方以智によって引かれたこの「郝京山譜」の本体がいかようなものであるかについて、これまであまり活発な考察はなされていないようで、管見の及んだところでは、耿振生氏が『明清等韻学通論』において、下記のような叙述をされているのが眼に留まったのみである（注4）。

“郝京山谱
书名未详，见于《切韵声原》及是奎《太古元音》诸书，其谱或即在《太古元音》所说的郝京山《读书通》内。《切韵声原》记载其韵目为同、迟、危、虞、孩、真、田、调、摩、邪、强、求。”

耿振生氏はここで、是奎の『太古元音』（注5）の叙述に基づき、「切韻声原」の引く「郝京山譜」は、郝京山の『読書通』の中に収められているものであることを示唆しておられる。筆者はいまだ是奎の『太古元音』を見る機会に恵まれていないが、以下に記述するような事実に基づいて、この耿振生氏の意見に同意したく思う。

2．郝敬と「京山」

「切韻声原」は紹介にあたり、同譜を「郝京山譜」と称しているが、この郝京山は、おそらく明末の大儒郝敬であろう。『明史』や『明儒学案』の伝によれば、郝敬は、明の嘉靖37年（1558）に生まれ、崇禎12年（1639）に享年82歳で卒した。字は仲輿、また楚望と号し、楚の京山（明の湖広、承天府所属。現在の湖北省京山県。）の人で、父の承健は粛寧（京師、河間府所属。現在の河北省、粛寧県。）の知県を勤めた人であった。若い頃、同郷の父の友人李維禎の教えを受け、万暦17年（1589）に進士となり、礼科及び戸科の給事中を勤めたが、万暦時代の礦税とそれに伴う弊害を糾弾して退けられ、次いで官を辞し読書と著述にふけった。この間の状況を、郝敬自ら、「休老之室記」（注6）では「余未だ五十ならずして帰休す」と言い、『談経』（注7）の天啓４年（1624）の自序では「軌を掃ひ門を杜ざすこと二十年」と称している。生前地方官としては縉雲（浙江、処州府所属。現在の浙江省、縉雲県。）・永嘉（浙江、温州府所属。現在の浙江省、温州市。）・江陰（南京、常州府所属。現在の江蘇省、江陰県。）等の知県に任じられたことがあった。

『明史』等の本伝のほか、近人の業績では、村上吉広氏の「『毛詩原解』序説」や台湾の蒋秋華氏の「郝敬的詩経学」等に郝敬の生涯についての詳しい記述があるが、村上氏の論文によれば、「郝敬字は仲輿、湖北省京山県の人であり、郝京山と称される。」（注8）とあり、郝敬が、その本籍地の地名を取って、「郝京山」と呼ばれたことがわかる。

3．郝敬の著作

郝敬にはまた、『太古元音』が言及していると言われている「読書通」と、同名の著作がある。郝敬の主な著作は、下記の『郝氏九経解』と『山草堂集』の２つの叢書に収められており、また若干が『湖北叢書』に採録されている。それぞれの叢書が収録している著作を『中国叢書綜録』の示すところに従って一覧してみよう。

『郝氏九経解』（明）郝敬撰　鈔本（注9）

「周易正解」二十巻

「尚書別解」八巻

「毛詩原解」三十六巻

「春秋直解」十五巻

「礼記通解」二十二巻
「儀礼節解」十七巻
「周礼完解」十二巻
「論語詳解」二十巻
「孟子説解」十四巻

『湖北叢書』（清）趙尚輔輯　清光緒十七年（1891）三餘草堂刊本
「易領」四巻　（明）郝敬撰
「尚書辨解」十巻　（明）郝敬撰
「毛詩原解」三十六巻　（明）郝敬撰
「春秋非左」二巻　（明）郝敬撰

『山草堂集』（明）郝敬撰　明万暦崇禎間郝洪範刊本

内編
○「談経」九巻
○「易領」四巻
○「問易補」七巻
○「学易枝言」四巻
「毛詩序説」八巻
○「春秋非左」二巻
○「四書摂提」十巻附録一巻
○「時習新知」六巻
○「閑邪記」二巻
「諫草」二巻
「小山草」十巻
「嘯歌」二巻
「藝圃傖談」四巻
「史漢愚按」八巻
「四書制義」六巻
○「読書通」二十巻

外編
○「批点左氏新語」二巻
「批点史記瑣瑣」二巻
「批点前漢書瑣瑣」四巻
「批点後漢書瑣瑣」六巻
「批点三国志瑣瑣」四巻
「批点晋書瑣瑣」六巻
「批点南史瑣瑣」四巻
「批点北史瑣瑣」四巻
「批点旧唐書瑣瑣」四巻
「批選杜工部詩」四巻

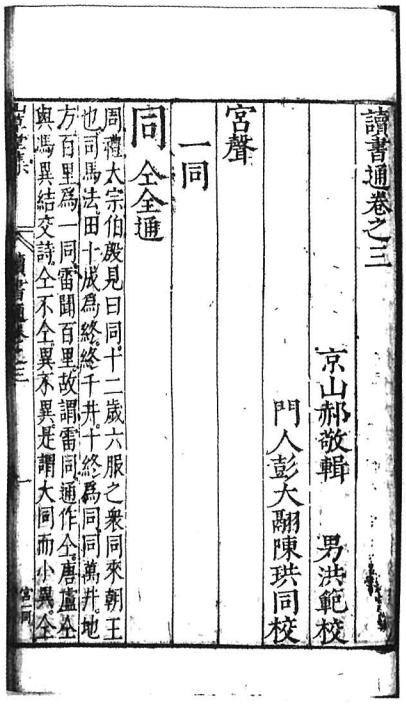
筆者は幸いにして、尊経閣文庫所蔵の『山草堂集』の閲覧を許され、内編に収録されている『読書通』の内容を見ることができた。この尊経閣文庫所蔵の『山草堂集』は完全な本ではない

ようで、同文庫の漢籍分類目録においても「闕本」と注されている（注10）ように、『中国叢書綜録』が記す収録著作のすべてを存しているわけではない。上記のリストのうち、書名の前に○を付けてあるのが、尊経閣文庫蔵『山草堂集』に存しているもので、本の地の部分に記されている冊数表示でみると、「内編」が18冊に製本されているうちの12冊分と、「外編」の第１冊目（全体でいうと第19冊目）のみを存している。「内編」では「毛詩序説」にあたると思われる第５冊目と、「諫草」から「四書制義」にあたると思われる第11冊から第15冊目が欠けていて、最後の第16冊から第18冊目にあたる３冊が『読書通』である。この『読書通』には、天啓３年(1623)の「題辞」と崇禎３年(1630)の跋（いずれも著者自身によるもの）が付けられていて、その頃までに成立していたらしいことが推測される。そして、各巻の初めには、「京山郝敬撰、男洪範校」「門人彭大翮陳珙同校」とあって、校訂に子息や門人が係わっていることがわかる。そして、この『読書通』の巻之二には、「五声譜」という韻別に排列した文字表形式の韻書（題名にならって韻譜と言うべきか？）があり、次章に述べるごとく、これが「切韻声原」所引の「郝京山譜」ではないかと思われるのである。

４．『読書通』巻之二に収録された「五声譜」

『山草堂集』内編第十六に収められている『読書通』は、全部で二十巻から成るが、本文は巻之三から始まっている。巻之一には「四韻糾謬」と題された総論的な文章が収められ、巻之二が「五声譜」である。『読書通』の本文は、後にも述べるごとく、個々の漢字の相互の間に見られる仮借や通用、或いは同義で用いられる等の関係を、見出し字ごとに解説したもののようであるが、本文の見出し字の配列順は、まず全体が声調によって分けられ、各声調の内部は更に韻によって分けられていて、あたかも韻書と同じような体裁になっており、その声調や韻の種類は「五声譜」のそれに倣っているようである（図版１）。

「五声譜」の体裁は次のようなものである。まず全体が５種類の声調（ひとまずこのように解釈しておく）「宮声」・「商声」・「角声」・「徵声」・「羽声」に分かれている。それぞれの「声」の内部は更に12個ずつの韻に分かれている。各韻には、その韻に所属する発音を持った字が配列されているわけであるが、所属字には音注も義注もついていない。韻の内部は、漢字がずらりとならんだ文字表の様相をなし、ところどころが丸印（○）で区切られている。『中原音韻』とよく似た体裁である。但し、最後の「羽声」とその所属韻は実質上「虚設」に近く、韻目があるのみで、所属字が全く掲載されていない。「羽声」を除いた他の「声」、すなわち「宮声」・「商声」・「角声」・「徵声」は、各の所属字から考察して、それぞれ平声、上声、去声、入声にあたると考えられる（図版２）。


讀書通卷之三

京山郝敬輯　男洪範校

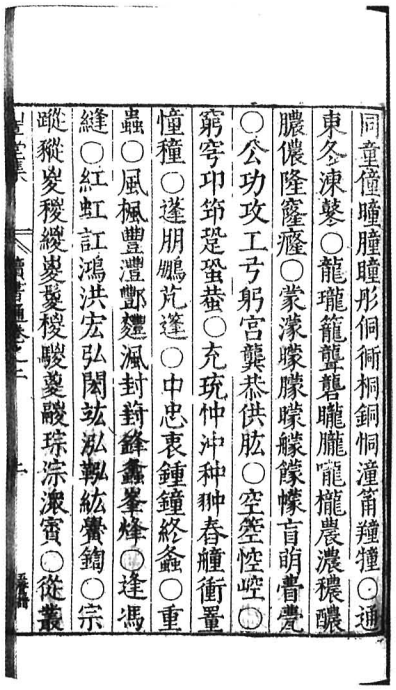
門人彭大翮陳珙同校

宮聲

一同

同　全全通

周禮太宗伯殷見曰同十二歲六服之衆同來朝王也司馬法田十成爲終終千井十終爲同同萬井地方百里爲一同雷聞百里故謂雷同通作仝唐盧仝與馮翼結交詩仝不仝異不異是謂大同而小異仝


同童僮曈膧瞳彤侗衕桐銅恫潼筩羶犝○通

東冬涷蝀○龍瓏籠聾礱朧曨朧寵櫳農濃穠醲

膿儂隆窿癃○蒙濛曚朦曚艨饛幪盲甿曹甍

○公功攻工弓躬宮龔恭供肱○空箜悾崆○

窮穹邛笻茳跫蛩蛬○充琉忡沖种翀舂艟衝罿

憧穜○蓬朋鵬芃蓬○中忠衷鍾鐘終螽○重

蟲○風楓豐澧酆灃酆渢封葑鋒蠭峯蜂○逢馮

縫○紅虹訌鴻洪宏弘閎竑泓鞃紘賳鍧○宗

蹤豵岌稷綫嶷鬈嶷駿夔嶷琮淙漎賓○從叢

図版1
（尊経閣文庫蔵『山草堂集』内編所収『読書通』巻之三　第一葉の表「宮声一同」冒頭の部分）

図版2
（尊経閣文庫蔵『山草堂集』内編所収『読書通』巻之二　第二葉の表「五声譜」「宮声」一「同」韻の本文冒頭の部分）

次にそれぞれの「声」の所属韻の韻目を一覧表にしてみれば下記の通りである。そのうち「宮声」の韻目は、方以智が「切韻声原」に引く「郝京山譜」の韻目と、六「沈」（読書通）と「真」（切韻声原）の１例を除いて全く一致している（厳密に言えば、十一の「彊」（読書通）と「強」（切韻声原）も異なっていると言わなければならないかもしれないが、たいへんよく通用する文字同士であるので、ここでは計算に入れない）。従って、「切韻声原」が言及する「郝京山譜」はやはりこの「五声譜」のことではないかと思われるのである。

宮声	同	遲	危	虞	孩	沈	田	調	摩	邪	彊	求
商声	統	齒	偉	語	海	逞	忝	窕	麼	寫	襁	臼
角声	洞	穉	魏	遇	害	趂	簟	眺	磨	謝	絳	舊
徵声	篤	徹	號	月	黑	質	鐵	滌	末	褻	甲	屈
羽声	東	志	屋	薬	汗	真	天	殿	禡	削	鑑	鳩

韻目のうちのいくつかには、当該の韻が他の韻と「通」じる関係にあるという注（「与～通」）が付記されている。まず、「宮声」・「商声」・「角声」においては次のような注が見られる。

宮声　「九摩　舊與邪通」　「十邪　舊與摩通」
商声　「九麼　舊與寫通」　「十寫　舊與麼通」

それならば、「宮声」・「商声」と相対応する性格をもつと考えられる「角声」においても、九の「磨」韻は十の「謝」韻と「通」でありそうなものであるが、残念ながらそのような注は「角声」の韻目には付いていない。いずれにせよ、「与～通」が注記されているといないとにかかわらず、「宮声」・「商声」・「角声」の９番目と10番目の韻には、両方の韻にそれぞれ所属字があって、基本的に重複しない。なお、この「摩」と「邪」の２系列の韻が「通」であることについて、『読書通』の本文においては、いずれの韻目にも「与～通」といった注は付されていないが、その代わり、「宮声」十「邪」韻の韻目の下に、次に引用するような注がついている。

「沈韻六麻内、蛇奢邪嗟等字並収入作舌音、今据方語人言、多作歯音、与麻不叶。故別為邪韻収之。又入声有作平声呼者、如或活舌之類、亦並附入。」

「切韻系韻書」に見られる「麻」韻は、後に主母音が分岐して、『中原音韻』における「車遮」韻を派生するに至ったが、郝敬もまた同様に、「麻」韻とは「不叶」であるとして「邪」系の韻を別立てにしてはいるものの、それを「方語人言」の発音であると位置づけ、本来は両者は「通」であるという立場に立ったものであろうか。なお、「切韻系韻書」では、「歌」韻と「麻」韻は別韻であるが、郝敬にあっては、合併して「摩」韻を形成しているものと考えられる。さらに、これらの韻に若干の入声字が含まれることも、ここで著者によって特記されている。

さて、上記のように、「邪」等の韻は、「与～通」の注記を持つとはいえ、なお自身の所属字を有しているのであるが、入声にあたる「徵声」の韻になると様相が異なる。

徵声　「三虢　與徹通」　「四月　與徹通」　「五黒　與徹通」　「七鐵　與徹通」
　　「八滌　與質」　「十褻　與徹通」

「八滌　與質」は最後の「通」の文字が誤って落ちたものかと想像されるし、また『読書通』本文の同じ韻目に付された注と内容の異なる部分もあるが（注11）、それらの考察はひとまず置くとして、これら６つの、他の韻に「通」じる「徵声」の韻には全く所属字が掲載されていないことがまず目に留まる。このことは『読書通』の本文においても同じで、これらの韻には所属する見出し字が全くなく、ただ韻目が表示されているのみである。すなわち、入声の韻は実質上「篤」・「徹」・「質」・「末」・「甲」・「屈」の６韻しかなく、敢えて言うなら、他の６韻は、12個の韻の数を合わせるために「虚設」されたものだということになる。そして、実質上存在する「篤」

・「徹」・「質」・「末」・「甲」・「屈」の６韻の配列順を見ると、陽声類の韻に対応する位置に列せられているもの（「篤」・「質」・「甲」）と陰声類の韻に対応する位置に列せられているもの（「徹」・「末」・「屈」）とがある。

更に、先にも述べた通り、第５の声調「羽声」は声調そのものが「虚設」、或いは別の規準を導入して設置されたものであり、12の韻に所属字は全くない。『読書通』の本文に至っては、体裁の中に「羽声」が全く現れず、見出し字は、「宮」・「商」・「角」・「徵」の四声に分類されているのみである。そして、「五声譜」の「羽声」に配列された12の韻目の下には、たいへん難解な「通」関係が注記されている。これについては、次の５で若干の考察を加えることとする。

羽声　「一東　與同通」　「二志　與穉通」　「三屋　與屈通」　「四薬　與末通」
　　「五汗　與炭通」　「六真　與沈通」　「七天　與田通」　「八殿　與簟通」
　　「九禡　與磨通」　「十削　與末通」　「十一鑑　與簟通」　「十二鳩　與求通」

５．第五の声調（？）「羽声」について

所属字が全くないので、所属字の発音や意味から、実質を推測することが不可能であるばかりでなく、郝敬自身による解説を見てもその性格の把握に苦しまされるのがこの５つめの「声」すなわち「羽声」である。この５声調体系は「郝京山譜」の際だった特徴の１つと目されていたらしく、方以智の『通雅』（五十「切韻声原」）も方中履の『古今釈疑』（巻十七「切字釈疑」）もこのことに触れている。すなわち、

『通雅』五十「切韻声原」
「郝京山以四声後転一声為五，何如此乎？」

『古今釈疑』巻十七「切字釈疑」
「啌噎上去入」
「…，郝京山論平上去入之下更有一声，如崩韡琫不幇是也。此乃帰母耳，不能定其必為幇，或為把，或為奔皆可。何如啌噎上去入之自然不移也。按西儒耳目資亦以清濁上去入為五声，正与啌噎上去入闇合。蓋五音相生為宮徵商羽角，既生之後則宮商角徵羽，其声以次漸高。人之啌噎上去入乃自然之宮商角徵羽，唇舌牙歯喉則初排位立号之羽徵角商宮也。以噎起以啌収，即京山之意，京山不言啌噎而別贅一字則似蛇足耳。」

「切韻声原」の叙述は甚だ簡潔であるが、それが述べられているのは、方以智の自説である「啌噎上去入」（陰平・陽平・上・去・入）の五声説を開陳した一説においてである。また、方中履

の「切字釈疑」の叙述からは、やはり郝敬の五声説が「啌噎上去入」の五声説と比べて批判されていることが見て取れる。

郝敬自身の解説によるとどうであろうか。『読書通』巻之二「五声譜」の巻首に掲げられた短い総論「五声十二韻」の中では、下記のような記述が「五声」を解説していて、「沈韻」、これは沈約の韻という意味であろうから、つまり「切韻系韻書」とその流れを引く韻書の採用する四声の体系を修正して音韻上いっそう完備したものにするという意図によって成った説であるという立場を表明していると受け取れる。

「五声者。本沈韻四声。引而伸之。為完音者也。」

「五声譜」の内に見える記述は上記のようにたいへん簡潔なものであるが、このほかに、『読書通』巻之一「四韻糾謬」に次のような一節があって、詳しく彼の「羽声」の説明をしている。

「凡宮声五転生羽。①宮低羽高。故平声為宮。平而下。則宮也。平而上。即羽也。沈韻以東冬為平。不知東冬本羽声。以為平。則東当作同。同統洞突東。同下平。而東与冬上平也。上平為羽。声高而軽也。下平為宮。声低而重也。江当作匡。而江為羽。支当作遅。而支為羽。真当作称。而真為羽。文当作焚。而文為羽。元当作玄。而元為羽。先当作遷。而先為羽。蕭当作鍬。而蕭為羽。陽当作殃。而陽為羽。庚当作坑。而庚為羽。青当作情。而青為羽。蒸当作沈。而蒸為羽。羽浮而宮湛也。②今混以羽為平。而分上平下平。謂平有高低乎。不知既謂平。則高者即不平。高而浮。即羽矣。又烏得謂之平。然則所謂下平者。本皆宮也。今不以為宮而分上下。豈以前後篇目。為上下乎。抑以声音高低。為上下乎。如以前後篇目分上下。則江与陽。真与庚蒸。文与青。元与先塩。刪与覃。寒与咸之類。前後重復混雑。上可為下。下可為上。如以声音高低為上下。則東冬江支微灰真文元之類。為上平可也。其魚虞斉佳寒刪等。皆下平。可以為上乎。先蕭陽青蒸庚等。皆上平。可以為下乎。③其肴豪歌麻之類。雖下平。然声五転後。或平或仄。随協皆可。如肴暁孝学梟。梟雖平声。若肴暁孝学悻。悻又上声。若肴暁孝学献。献又去声。若肴暁孝学隙。隙又入声。如豪昊號霍蒿。蒿雖平声。若豪昊號霍虎。虎又上声。若豪昊號霍嚇。嚇又去声。若豪昊號霍赫。赫又入声。歌麻又可推矣。豈得謂平定還平。遂分上下。限四声乎。牽強跡戻如此。余故謂沈韻不可信。不待知者而知也。」

この叙述の中では、説明にあたって、韻目字や例字が掲げられているから、それらの文字の発音からいくらかのことが推測できそうである。便宜上、上記の引用に付した番号のごとく、全体、特に挙例を含む部分を①・②・③の３つの部分に分けて検討してみたい。まず、①の部分の例を見てみよう。先にも見たように、方以智や方中履は「切韻声原」等（『西儒耳目資』などもそう

である）が採用する５声調体系（陰平・陽平・上・去・入）と比較して「郝京山」の五声説を批判しているから、郝氏の声調体系は、このような代表的な五声説の存在に影響されて考え出された、しかしそれとは似て非なるものだったとまず想像してみることとし、方以智等の五声説が、平声が陰陽調に分かれた現象を基礎としていることに鑑み、その観点から、郝氏が例に掲げる「羽声」と「宮声」の例字の声母とその清濁を一覧して見れば、次のようになる（注12）。

羽声（上平声。高くて軽い。）	宮声（下平声。低くて重い。）
東（端母　全清）冬（端母　全清）	同（定母　全濁）
江（見母　全清）	匡（溪母　次清）
支（章母　全清）	遅（澄母　全濁）
真（章母　全清）	称（昌母　次清）
文（微母　次濁）	焚（奉母　全濁）
元（疑母　次濁）	玄（匣母　全濁）
先（心母　全清）	遷（清母　次清）
蕭（心母　全清）	鍬（清母　次清）
陽（以母　次濁）	殃（影母　全清）
庚（見母　全清）	坑（溪母　次清）
青（清母　次清）	情（従母　全濁）
蒸（章母　全清）	沈（澄母　全濁）

この①の部分の記述を見ると、郝敬は、「沈韻」（沈約の韻の意であろう）すなわち『広韻』などの平声の韻目は、「宮声」と「羽声」の字を交え用いていて、不合理であると考えているようであり、彼にとっては、第１の声調「宮声」は方以智らの「喤」すなわち陽平調であって、最後の「羽声」が、不足するところの「啌」すなわち陰平調を補うものであるかに見える。しかし、彼の掲げる例を見ると、対応する「羽声」と「宮声」の字は、残念ながら、「全清」字対「全濁」字といったすっきりしたペアばかりではない。しかし、上記のような対応関係から、次のような「軽」「重」の階層が見てとれるかと思われる。すなわち、「全清」（心母を含む）は「次清」より「軽」く、「次清」は「全濁」より「軽」く、「次濁」も「全濁」（匣母を含む）よりは「軽」い、という関係である。

軽　：　重
全清　：　次清
全清　：　全濁
次清　：　全濁

次濁　：　全濁

但し、この基準にあてはまらないペアが既に１つある。すなわち、「陽」（羽）と「殃」（宮）がそうであって、関係が上の基準と逆になっている。

しかも、次の②の部分の記述に至ると、もはやこの通りには解釈できなくなる。郝敬によれば、「切韻系韻書」及びその流れを汲む韻書に見られる平声の韻目は、もしも「上平声」と「下平声」を音の高低によって分かったならば、不合理な代表字を韻の名称として選んでいると言えるのであって、郝敬の判定によれば、現行の韻目の状況は次のようである（右端のかぎかっこの中の文言は郝敬自身の記述。また、下行のかっこのなかには韻目字の声母を注記し、「：」の後に声母の清濁を記しておいた）。

東・冬・江・支・微・灰・真・文・元　「為上平可也。」
（端・端・見・章・微・曉・章・微・疑　：　全清（曉母を含む）と次濁）
先・蕭・陽・青・蒸・庚　「皆上平。可以為下平。」
（心・心・以・清・章・見　：　全清（心母を含む）と次清と次濁）
魚・虞・斉・佳・寒・刪　「皆下平。可以為上平。」
（疑・疑・従・見・匣・生　：　全清と次濁と全濁）
肴・豪・歌・麻　「雖下平。然声五転後。或平或仄。随協皆可。」
（匣・匣・見・明　：　全清と次濁と全濁（匣母））

一応「全濁」字の韻目を持つものはみな「下平」に入っているようではあるが、それ以上どのような基準によって分かたれているのか、現在のところ筆者には見出せない。

しかも、③の部分の叙述を見ると、郝氏は、羽声は平声に転じると限ったものではないとさえ言うのである。何故、「肴」・「豪」・「歌」・「麻」等の韻においてのみそのような現象が起こるとされているのか、現在の筆者は理解に苦しんでいるけれども、「肴曉孝学」の四声に対応する第五声、「豪昊號霍」の四声に対応する第五声の音としては、それぞれ異なる声調を持つ４つの音があり得るらしいのだ。

「肴（肴韻匣母）曉（篠韻曉母）孝（效韻曉母）学（覚韻匣母）」梟は平声（梟は蕭韻見母。普通話では xiāo になっている。）（梟は全清／陰調　肴は全濁／陽調）
「肴曉孝学悻」悻は上声（悻は全濁　『集韻』下耿切：耿韻開口匣母）
「肴曉孝学献」献は去声（献は全清　願韻開口曉母）
「肴曉孝学隙」隙は入声（隙は次清　陌韻三等開口渓母。普通話では xì になっている。）

「豪（豪韻匣母）昊（晧韻匣母）號（号韻匣母）霍（鐸韻合口暁母）蒿」蒿は平声（蒿は豪韻暁母）（蒿は全清／陰調　豪は全濁／陽調）
「豪昊號霍虎」虎は上声（虎は全清　姥韻暁母）
「豪昊號霍嚇」嚇は去声（嚇は全清　禡韻二等開口暁母・入声陌韻二等開口暁母）
「豪昊號霍赫」赫は入声（赫は全清　陌韻二等開口暁母）

ますます融通無碍であって、同声母の他の韻母を持った音節に「転」じさせれば「羽声」になると言わんばかりに見える。清朝小学において言われた「一声之転」のごとくである。

「五声譜」羽声の韻目に注記された「通」じる韻との関係はどうであろうか。先に4で一覧したように、「通」の注記は下記のようであった。

「一東　与同通」「二志　与穉通」「三屋　与屈通」「四薬　与末通」「五汗　与炭通」「六真　与沈通」「七天　与田通」「八殿　与簟通」「九禡　与磨通」「十削　与末通」「十一鑑　与簟通」「十二鳩　与求通」

これらを見ても、「羽声」の韻は平声とは限らず、平声でないものは同声調の韻と「通」じるので、従って「羽声」は「宮声」の韻とのみ「通」であるのではないことがわかる。中には韻目字ではない文字があげられているものもあるし、十二韻の順番で相対応しない韻と「通」であるとされているものもある。いくつかに分類して観察してみよう。

(1) 平声の陰調と陽調の対立として解けるもの
（以下、いずれも左端は「羽声」の韻、次が注においてそれと「通」であるとされている韻、或いは字。）
1東（平声東韻一等端母）　同（平声東韻一等定母）
6真（平声真韻開口章母）　沈（平声侵韻澄母）
7天（平声先韻開口透母）　田（平声先韻開口定母）
12鳩（平声尤韻見母）　求（平声尤韻群母）

これら、「羽声」が平声であるものでは、それと「通」とされている韻は、相対応する「宮声」の韻であることがわかる。

(2)「羽声」が去声のもの
2志（去声志韻開口章母）　穉（去声至韻開口澄母）　対応する韻は角声「穉」、宮声「遅」。

5汗（去声翰韻開口匣母）　炭（去声翰韻開口透母）　対応する韻は角声「害」、宮声「孩」。
8殿（去声霰韻開口定母）　簟（上声忝韻定母）　対応する韻は角声「眺」、宮声「調」。
9禡（去声禡韻二等明母）　磨（去声過韻明母）　対応する韻は角声「磨」、宮声「摩」。
11鑑（去声鑑韻見母）　簟（上声忝韻定母）　対応する韻は角声「絳」、宮声「彊」。

(3) 羽声が入声のもの
3屋（入声屋韻一等影母）　屈（入声物韻溪母）　対応する韻は徵声「號」（號韻は「与徹通」）、宮声「危」。
4薬（入声薬韻開口以母）　末（入声末韻明母）　対応する韻は徵声「月」（月韻は「与徹通」）宮声「虞」。
10削（入声薬韻開口心母）　末（入声末韻明母）　対応する韻は徵声「褻」（褻韻は「与徹通」）、宮声「邪」。

「羽声」の韻目は、平声字でなければ、去声か入声であるが、去声字や入声字の「羽声」と「通」とされている韻（或いは文字）はいずれも同声調のものである。そして、三の「屋」に対する「屈」、五の「汗」に対する「炭」、四の「薬」に対する「末」、八の「殿」に対する「簟」、十の「削」に対する「末」、十一の「鑑」に対する「簟」など、いずれもその「羽声」が配されている韻とは別の韻或いはそれに属する字なのである。

以上をまとめて、甚だ精密を欠くけれども、考察の端緒を求めるとすれば、次のようなものであろうか。すなわち、「切韻系韻書」等から継承された四声の他に、第5の「羽声」があるという郝氏の考えは、上の「東」対「同」、「真」対「沈」、「天」対「田」、「鳩」対「求」のペアが暗示するように、一方で、平声における陰陽調の分裂という現象や当時提唱されていた五声説を踏まえてはいた。しかし、『読書通』が解説するような文字の通用における字音の通転現象とそれとがいつしか関連させられてしまい、方中履の批判するごとく、どんな音にも自由に変化可能（文字の通仮に関する観察から導き出された一定の制限範囲が想定されているのかもしれないが）という内容へとすり替わってしまったのではなかろうか、ということである。なお、郝氏が『詩経』の押韻箇所を読むにあたって協韻説に類似したものを操作していることは『毛詩原解』の音注などから推察できるので、協韻説の影響もあるかもしれないと思う。

6．韻中の○は音節の異同を示すか？

前にも述べたように、「五声譜」の各韻の内部は、音注も義注もない単字の一覧表とも言うべき形式になっていて、文字と文字の間の所々に丸印（○）が描かれている。あたかも『中原音韻』のような体裁になっている。『中原音韻』であれば、文字群と文字群の間の「○」は、音節がそ

こから異なること、つまり小韻の切れ目を標示しているのであるが、「五声譜」の場合もこれと同じように解釈できるだろうか。

これも先に述べたことだが、『読書通』の本文は、漢字１字ごとに他の文字との間の仮借・通用・同義等の関係を解説した、字書のような形式になっており、ただ見出し字が発音順（声調・韻別）の配列になっているのが、特徴である。著者には、そうすることで、漢字と漢字の間の「音通」と「義通」の網の目のような関係を浮き彫りにしたいという意図があったのではないかと、筆者はひそかに想像しているが、ともあれ、この『読書通』本文の、見出し字とその下部に列挙されたそれと「通」用するいくつかの文字、それらの構成する文字群（つまり通用字のグループと呼べばよいか）と、「五声譜」の「○」から「○」までの間に表示された文字群（便宜上、一応「小韻」と呼んでおいてもよいが）とは一致していない。例えば、『読書通』巻之三　「宮声」「一同」の冒頭部分の見出し字を、見出し字の下にやや小さい字で示されている「通」用の字（下記ではかっこに入れて示した）とともに掲げてみると、次のようであるが、

同　（仝全通）
童　（同僮侗桐吾瞳重鍾）
融　（彤彤）
窮　（匑穹空卭）
空　（孔穹）
……

例えば、上記のうち、４番目の「窮　匑穹空卭」の条は「窮」字と「匑」・「穹」・「空」・「卭」等の字の「通」用を、５番目の「空　孔穹」の条は、「空」字と「孔」・「穹」等の字の「通」用を、それぞれ用例をあげて解説したものであるが、この２条では、両方に「空」と「穹」の２字が重複していることはともかくとして、２つの条を構成する文字、すなわち「窮」「匑」「穹」「空」「卭」「孔」などを、「五声譜」で探してみると、それらがいくつかの別の「小韻」に分かれて現れていることがわかる。

「宮声」「一同」　○公功攻工弓躬宮龔恭供肱（「匑」字は見えない。）
同上　○空箜悾崆
同上　○窮穹卭筇跫蛩蛬
「商声」「一統」　○恐孔拱栱鞏拲礦麷獷

従って、「五声譜」の「小韻」の別は、『読書通』の見出しの文字群とは別の基準で分けられているものであろう。では、やはり『中原音韻』等と同じく、同音の文字のグループであるのだろう

か。「五声譜」の全体をざっと通覧して、「○」で区切られた範囲内には、同音ではないかと推測される文字群や、かりに区別がより緩やかであることがあったとしても少なくとも発音部位や発音方法において同類の声母を持つ文字群が置かれているように思われる。しかし、筆者の見た尊経閣文庫蔵『山草堂集』所収の「五声譜」の全巻が、そのような基準によって厳密に、有るべき箇所に必ず「○」を刻印しているかというと、必ずしもそうでないことを立証するような部分が存在しているのである。

例えば、極端な例として、韻の内部に「○」の表示が全く見られない韻がある。「宮声」「十邪」韻や、「商声」「五海」韻がそうである。「宮声」「十邪」韻・「商声」「五海」韻はそれぞれ次のような文字群から構成されている。

「十邪」(かっこ内は筆者が中古音における声母を示したものである。)
「邪斜(以上2字邪母)奢賒(以上2字書母)蛇(船母)賊截絶(以上3字從母)或活畫(以上3字匣母)遮(章母)爺(以母)爹(知母)嗟罝(以上2字精母)茄(見・群母)」

「五海」(同上)
「海(暁母)蟹(匣母)凱愷鎧塏(以上4字溪母)改(見母)楷鍇(以上2字溪母)駭駴澥(以上3字匣母)買(明母)擺(幇母)矮毐藹靄(以上4字影母)醢(暁母)娭(影母)亥(匣母)乃(泥母)待紿怠(以上3字定母)彩(清母)宰(精母)采寀綵(以上3字清母)莊(昌母)灑洒(以上2字生母)」

両韻とも、確かに「五声譜」においては、所属字の少ない韻ではあり、なかんずく「邪」韻は、先の4で見たように、もともと隣接する「摩」韻と通じる韻であることが著者によって注明されている特殊な性格を持ってはいるけれども、しかし、1つの韻がたった1個だけの音節しか含んでいないという状況は想定しにくいし、「邪」韻や「海」韻に配列されている文字群を見、その中古音を考えると、それらが「五声譜」において皆が同じ声母を持つ音に変化しているとか、1つのグループを構成して差し支えないような何らかの条件が推定できるかどうか、かなり慎重な考察を要すると言わねばならない。これらの韻には、例外的に、音節の区別が標示されなかったという可能性も大きい。

また、いわゆる「四声相配」の原則に照らして相対応する韻(つまり配列の順番が同じ韻)でありながら、小韻の切れめの入れ方の傾向が異なっていると思われるものも存在する。これもやはり、問題の十番目の韻「邪」(宮声)「写」(商声)「謝」(角声)であって、ほぼ下記のような状況を呈している。

・「邪」韻には小韻の切れ目が全くない（前述の通り）。
・「写」韻は切り方が細かく、各「小韻」の所属字が１～２字である。そして、「者」（上声馬韻三等開口章母）と「赭」（「者」と同音）とがそれぞれ１字だけで別の箇所に独立した「小韻」を形作っていたり、「也」（上声馬韻三等開口以母）字と「野」・「冶」の２字（ともに「也」と同音）との間が「○」で区切られていたりする。「惹」字が１字だけで、６番目と11番目にそれぞれ別の「小韻」を形成しており、従って同じ内容が前後重複しているなど、編集の乱れ（そう言い切ってよいかどうかわからないが）も見受けられる。
・「謝」韻は区切りの細かさにおいて、両者の中間的傾向にあるが、「舎」（書母）と「借」（精母）「藉」（従母）が同「小韻」であったり、、「這」や「鷓」「蔗」「柘」（章母）と「夜」（以母）が同「小韻」であったりするのは、果たして厳密に１つの「小韻」が１つの音節から成ると断定し切れるかどうか疑わしい。

「五声譜」の「小韻」の意味を正確に把握するのはむずかしく、「小韻」そのものが示すものについても、今後も更に詳密な考察を要する。もともとが文字の「通」用現象を取り上げた書物に関連する「韻書」であるし、全巻を見渡していると、同じ声符を共有する形声文字が連続して登場する部分が各所に眼につくから、「五声譜」の音節の区別は、完全に「当時の」音節の区別だけを反映しているのではなくて、郝氏の考えるある種の「古音」（或いは「古音」と矛盾しない標準音とでもいったもの）を表現しようとした側面を備えている可能性も否定してしまうわけにいかない。例えば、巻末近く、「徵声」の最後の韻である「屈」韻の冒頭に、次のような２つの「小韻」が前後に並んでいる部分がある。

○屈曲……（中略）……橘繘鵙鬨鷸　○聿律率遹

２つめの「小韻」の所属字を見ると、「聿」・「遹」は以母の字であるのに、両者に挟まれた「律」・「率」は来母の字であって声母が異なると思われるが、「律」・「率」が「聿」に続いて配列されているのは、「聿」という声符によって諧声系列をなす字であるからだろうか。しかし、一方、「遹」と諧声系列を形成する「橘」や「繘」（ともに見母）は、見・渓・群母など牙音見組の字が所属する第１の「小韻」の方にあって、やはり音節によって分けられているようでもある。ところが、同じく「矞」を声符として持ち、以母の字である「鷸」は何故か第１の「小韻」の末尾に置かれている。かといって、この「鷸」が実は第２の「小韻」の最初に来るべき文字であって、２つの「小韻」の区切れ目を示す「○」の位置が著者か刊行者の疎漏によって誤ったのだという判断を軽々に下してよいものとも思われない。

同じく、「屈」韻の中に次のような３つの「小韻」が連続している部分も見られる。

○述術訹朮秫　○役戌玈恤　○邨侐洫

２番目の「小韻」に所属する「役」は以母の字であるのに、続く３字「戌」・「玈」・「恤」は術韻心母の字であって、同じ術韻心母の字である「訹」は船母の字と一緒に第１の「小韻」のほうに入っており、第１の「小韻」はそれによって「朮」を声母に持つ諧声文字の系列を形成している。また、「役」の「小韻」に続く第３の「小韻」では、最初の字「邨」が術韻心母の字で第２の「小韻」末尾の「恤」と同音字であり、残りの２字「侐」・「洫」は職韻合口暁母の字である。そして、声符の点から言うと、「恤」以下４字は２つの「小韻」にまたがってはいるものの、諧声系列としては１つである。この第２・第３の「小韻」はいったいどのように切れるのであろうか。また、心母と暁母の字が同列に並んでいるからといって、直ちに、歯頭音声母と牙喉音声母の口蓋化などを想定してよいものであろうか。

かつまた、甚だしくは「○」が１つも表示されていない韻があるし、上記の「屈」韻の例なども或いはそうであるかもしれないが、「○」の位置や有無が不適切なのではないかという疑いを解消する作業からまず取りかからなければならないような文字の配列が見られる箇所もあって、特に譜の後半部分に至ると検討すべき箇所が多いように、筆者には思われた。ひょっとすると、現存する（全てのテキストとは言い切れないかもしれないが、少なくとも筆者の見た）「五声譜」の内容は、著者にとって完全に完成されたものではなかったか、自筆原稿上の混乱或いは読みにくさが版刻者に影響を与えたか、版刻者の知識不足のために改悪された部分があったのではないか、などの憶測も誘われ、これらの点も今後解決の要がある。

７．各韻の構成

上記６で述べたように、「五声譜」の各韻内部の音節の切れ目や、「○」で区切られた文字群の相互の声母の異同などについては、なお慎重な検討を要するが、幸い韻の切れ目だけは判然としているので、次に「五声譜」各韻の構成がどのような状況であるかを見てみることができる。初歩的な作業として、「五声譜」の各韻について所属字の中古音を調査し、それにもとづいて、平（「宮」）・上（「商」）・去（「角」）声の各韻（計12）と入（「徵」）声韻（計６）の内容構成を中古音との対応関係によって示せば、ほぼ下記のようであった。

（韻目は常用漢字等通行の字体で表示した。また、中古音における地位の表示の仕方は、例えば「通一・曽開一幇組」は、中古音で通摂一等と曽摂開口一等の幇組の声母を持った文字が当該韻に所属していることを示している。中古音声母のグルーピングは『方言調査字表』や李栄『音韻存稿』等の例に従った。左端の数字は韻の順番、２番目の欄は「五声譜」の韻目である。相対応する「宮」声・「商」声・「角」声は統合、「徵」声韻だけは別立てにした。）

1	同統洞	通一・曽開一幇組　通一三・梗二明母　通三非組 通一端組　通一三泥組　通一三精・莊組 通三知・章組　日組 通一三・曽合一・梗合二見組　暁組 通一影母 通三・梗合三暁母 通三影組
2	遅歯稚	止開三・蟹開四幇組 蟹開四端組（止開三「地」）　止開三・蟹開三四泥組 止開三精・莊組（蟹開四個別字） 蟹開三四精組　（止開三上心・生母「璽」「徙」「屣」「枲」等） 止開三・蟹開三知・章組　日組 止開三・蟹開三四見系（蟹合四平「携」「畦」蟹合三去「鰥」等）
3	危偉魏	蟹開一・蟹合一・止開三幇組　蟹開三四幇組 止合三非組 蟹合一端組　止合三・蟹合一泥組 止合三・蟹合一三　精・莊組 止合三・蟹合三知・章組　日組 止合三・蟹合一三四見系
4	虞語遇	遇一幇組（流一上明「母」） 遇三非組（流一去明「戊」） 遇一三泥組 遇三精・莊組 遇三知・章組　日組 遇一見系 遇三見系
5	孩海害	蟹合一開二幇組 蟹開一端組　泥組 蟹開一精組　蟹開二知組・莊組 蟹開一二見系　蟹開二見系 蟹合二見系
6	沈逞趁	臻開一・曽開一・梗開二合二（「横」等）見系 臻合一・曽開一・梗開二幇組 臻合三非組 臻開一端組（「呑」） 臻合一・曽開一端組　臻合一三・曽開一・梗開二泥組 臻合一三（「遵」等）・曽開一三（「甑」）精組　深三・臻開三・梗開二莊組 臻合一見系・臻合三（影母） 深三（「尋」等）・臻合三精組（梗開個別字） 臻合三知・章組 臻合三・梗合三四見系 臻開三・曽開三・梗開三四幇組 梗開四端組 深三・臻開三・梗開三四泥組 深三・臻開三・曽開三・梗開三四精・莊組 深三・臻開三・曽開三・梗開三知・章組　日組 深三・臻開三・曽開三・梗開三四合三四見系

7	田忝簟	咸開一・山開一端組　泥組　山開二娘母 咸開一・山開一精組　咸開二・山開二知組　莊組 咸開一二・山開一二見系　咸開二・山開二見系 山合一・山開二幇組　山合三明母 山合一端組　山合一三泥組 山合一精組（山合二三莊組） 山合一見系　山合二見系 山合三知・章組　日組 山合三四見系 咸合三・山合三非組 咸開三四・山開三四幇組 咸開四・山開四端組　咸開三四・山開三四泥組（合個別字） 咸開三四・山開三四精組（咸開二莊組）(山合三個別字) 咸開三・山開三知・章組　日組（娘母） 咸開三四・山開三四見系 山合三四精組（山合三莊組） 山合三四見系
8	調窕眺	效一二幇組 效一端組　效一二泥組 效一精組　效二知組　莊組 效一見系（效二見系） 效三幇組 效四端組　效四泥組 效三四精組（效三莊組） 效三知・章組　效二三莊組 效二三四見系
9	摩麼磨	果合一幇組　仮開二幇組（流一「母」遇一「姥」「謨」蟹合二「罷」） 果開合一端組（仮開三「爹」）　泥組 果開合一精組 仮開二知・莊組（仮開三「車」）　梗開二入「杙」→平声（知母） 果開合一見系 仮開二見系（蟹開二「佳」）（果開三「伽」） 仮合二見系（蟹開二）（果合三「韡」）
10	邪写謝	仮開三精組 仮開三知・章組（仮開二「苴」）　日組 仮開三以母 曽開一入・山開四入・山合三入→平声（従母） 曽一合入・梗合二入・山合一入→平声（匣母） 梗開三入「跖」→去声（章母）
11	彊襁絳	宕開一・江二・梗開二幇組　宕開一明母・宕合三微母 宕合三　非組 宕開一端組　宕開一泥組 宕開一精組 宕開三・江二知・莊組 宕開三知・章組　日組（娘母） 宕開三泥組 宕開三精組 宕開一見系　江二見系　宕開三見系　宕合一見系（梗合二見組）　宕合三見系

12	求臼旧	流一幇組 流一・遇一端組　泥組 流一・遇一精組　流三・遇三莊組 流一見系 流三四幇組 流三非組 流三知・章組　日組　通三入「軸」→平声（澄母） 流三四泥組 流三精組 流三四見系

入1	篤	通一入・臻合一入端組　通合一三入来母 通一三入・臻合一入精組・莊組　江二入莊組 通三入知・章組　日組（娘母） 通三入暁母　通三入・曽合三入・臻合三入影組，疑母
入2	徹	曽開一入・梗開二入・宕開一入幇組 曽開一入端組　曽開一入・山合一三入来母 曽開一入精組　梗開二入・曽開三入莊組・知組 曽開三入・臻開三入・深開三入生母 曽開一入・梗開二入・臻開一入見系（蟹開二上「駭」） 曽合一入・梗合二入・山合一入・宕合一入　見系 山開三四入幇組 咸開三四入・山開三四入端組　泥組（疑母・日母・梗開二入娘母） 咸開三四入・山開三四入精組　臻開三入莊組「櫛」　山合三入精組 咸開三入・山開三入知・章組　日組　山合三入知・章組　日組 咸開三四入・山開三四入見系 山合三四入見系（臻合三入「崛」）
入6	質	曽開三入・梗開三四入・臻開三入幇組（山開四入「幟」） 梗開四入端組 曽開三入・梗開四入・臻開三入・深開三入泥組 曽開三入・梗開三四入・臻開三入・深開三入精組・莊組（曽開一入「堿」） 曽開三入・梗開三入・臻開三入・深開三入知・章組　日組 曽開三入・梗開三四入・臻開三入・深開三入見系
入9	末	宕開一入・江二入・山合一入幇組 宕開一入・江二入端組・泥組　山合一入端組 宕開一入精組　江二入・臻合三入莊組（「率」「帥」「蟀」） 宕開一入・宕合一入・咸開一入・山開一入見系 宕開三入・江二入精組・莊組 宕開三入・江二入・通三入知・章組　莊組 宕開三入来母・日母 宕開三入・江二入見系　宕合三入見系
入11	甲	山合一入・山開二入幇組 咸合三入・山合三入非組 咸開一入・山開一入端組　泥組 咸開一入・山開一入精組　咸開二入・山開二入莊組・知組 咸開二入・山開二入・梗開二入見系　咸開四入見系 山合二入見系　生母

入 12	屈	通一入・臻合一入・江二入幇組　通三入明母 通三入・臻合三入非組 臻合三入来母 臻合三入・曽合三入・梗合三入　心母・暁母 臻合三入知・章組 通一入・江二入・臻合一入見系 通三入・臻合三入見系

8．「五声譜」の音韻的特徴について（若干の考察）

「五声譜」が反映する音韻体系の性格と特徴については、なお詳細に分析・検討すべきところが多く、現段階で結論に説き及ぶことはできないが、以下に、7で表に示した各韻の構成や「小韻」の所属字を見ての、いくつかの気づきを述べておきたいと思う。

既に上記1でも引用したが、方以智は『通雅』五十「切韻声原」の「旋韻図説」の条で、「郝京山」の十二韻について、

「郝京山亦分十二，而都尤則鄉言也，然鄉言亦古言也。」

と述べている。この記述によると、郝敬が彼の「十二韻」によって表したところの音韻体系は、方言音を規準としている部分と、それが古音に通じているという性格とを併せ持っているように受け取れる。そこで、初歩的な試みの1つとして、郝敬の本籍地とされる湖北省京山の方言音を参照してみたいと思い、『湖北方言調査報告』（趙元任等著　1938年序刊）をひもといた。しかし、更に多くの方言や音韻史料と対照しないで、直ちに「五声譜」に京山方言が反映されていると判断することはできない。従って、以下に筆者の気づきを述べるにあたっても、京山方言において関連する状況がどうなっているかを、数点について紹介してみるにとどめ（注13）、結論については、今後の課題として残しておきたい。なお、同『報告』のまとめ（pp.1567-1570「分区概説」）によれば、京山方言は、分区における第1区に属し、同区は名付けるなら「北方派」と呼ぶべきもので、1種の西南官話と位置づけることができるとのことである。

(1) 声母について

先に述べるとおり、筆者は、「五声譜」の「小韻」の切れ目と所属字の声母の同一性との間に、現在のところ確定的な関係を見出すに至っていないし、各「小韻」の構成については、今後いっそう詳細な検討が必要である。しかし、上の6で述べたように、「五声譜」の全体をざっと通覧した限りでは、「○」で区切られた範囲内には、同音ではないかと推測される文字群や、少なくとも発音部位や発音方法において同類の声母を持つ文字群が置かれていると思われる部分が多い。そこで、現段階では不確定な要素を含んでいるという前提の下に、顕著な事象のみを取り上げてみたい。

①全濁声母の清音への合流。

全濁声母の文字が清音声母の文字と併合されている「小韻」の例が多い。平声（「宮声」）において分立傾向があるのは、声調の陰陽調の分岐を反映しているためではないかと思う。但し、上記のように「五声譜」の「小韻」の立て方にはなお疑問が多く、全清・次清・全濁の３種の声母の文字が混在する箇所もたくさんあり、なお、声母の分合については、他の資料をも援用しての考察が必要である。

例　角声１洞　○洞（定母）痛（透母）慟動（定母）凍棟蝀（端母）

（例示にあたり「小韻」を構成する字に音を注する場合はかっこに入れて示す。かっこに先立つ文字がすべてその音を持つ。例えば、上記では「慟動」の２字がともに定母の音を持っている、等である。以下同じ。）

※京山方言では、全濁声母は無声化しているが、その際、閉鎖音・破擦音の声母は、平声では有気音に、仄声では、白話音が有気音、文言音が無気音になっている。

②泥母と来母が合流している（n- と l- の混同）。

例　宮声７田　○年（泥母）連聯蓮憐廉漣帘簾（来母）鮎拈（泥母）鎌攣（来母）

　　○難南喃諵男（泥母）嵐藍婪籃襤欄闌蘭爛瀾（来母）楠（泥母）

　商声８窕　○脳瑙（泥母）老潦橑（来母）悩（泥母）蓼獠（来母）

※京山方言では、洪音（直音）・細音（拗音）音節の両方で完全に合流し、n- になっている。『調査報告』によれば湖北省の他の地区（『調査報告』の言う第２区など）では「洪混細分」（南＝藍，年≠連）であるが、「五声譜」ではそういうことはないようで、上記の例でも、「○年」の「小韻」と「○難」の「小韻」の両方で同じように混同されている。

③精組・荘組・知組・章組等の分合について

・知組と章組は合流している。

例　宮声２遅　○支枝之（章母）知（知母）芝卮梔肢楮祗祇脂（章母）胝（知母）

・精組と荘組が合流している。

例　.宮声６沈　○生笙（生母）僧孫猻蓀飧（心母）森牲参槮甥（生母）

　　○尊曾増憎（精母）争臻蓁榛（荘母）遵（精母）繒嶒（従母）崢（崇母）矰（精母）

・韻によって、荘組と知・章組の合流した「小韻」も見られる。

例　宮声11彊　○霜雙孀鵊驦騴（生母）荘妝装（荘母）椿（知母）幢撞（澄母）瘡創窻（初母）

　　牀（崇母）

角声５害　○債（莊母）砦（崇母）瘵（莊母）瘥（初母）蠆（徹母）嘬（初母）

※京山方言では、精組・莊組・知組・章組とも、すべて ts-,ts‘-,s-である。他方、細音音節において精組・見暁組は tɕ-,tɕ‘-,ɕ-になっており、「尖団」の区別がない（注14）。

④影・云・以・疑母の合流している部分が見られる。

例　徵声１篤　○郁澳奠墺噢彧（影母）域（云母）玉（疑母）鬻儥賣欲（以母）獄（疑母）蜮罭閾棫（云母）浴慾　（鴿母）鬱（影母）

※このことは京山方言でも同じである。

(2) 韻母について

①鼻音韻尾の分合について。

上記７の表を見ると、深摂・臻摂・曾摂・梗摂の字を含む６「沈逞趁」韻において、-m,-n,-ŋ 韻尾の字が１つの韻に合流させられているようすがうかがえる。また、７「田忝簟」韻において、-m 韻尾の咸摂の字と-n 韻尾の山摂の字が１つの韻に合流している。

※京山方言でも同じで、鼻音韻尾は -n,-ŋ の２種類しかなく、中古音の -m 韻尾は -n 韻尾に変化している。そして、深摂・臻摂・曾摂・梗摂等の韻では -ŋ も -n に変化していて、鼻音韻尾が１種類になっている。

②３種類（-p,-t,-k）の入声韻尾が互いに区別されず同じ韻とされている。

上記の７の表の６つの入声韻の欄を参照すると、「篤」韻と「屈」韻においては、-t 入声と-k 入声の字が、「徹」韻・「質」韻・「末」韻・「甲」韻においては、-p,-t,-k３種類の入声字が１つの韻に混在していることが見て取れる。

※現代の京山方言では入声がない。閉鎖音韻尾を失い、母音で終わる音節になって、声調は陽平と合流している。

③遇摂の端組・泥組・精組・莊組字が流摂に合流している。

例　宮声12求　○愁（尤韻崇母）鄒騶（尤韻莊母）租（模韻精母）菆（尤韻莊母）掫（侯韻精母）陬（侯韻精母・尤韻莊母）棸（尤韻莊母）初（魚韻初母）粗麤（模韻清母）鋤（魚韻崇母）蘇酥（模韻心母）疎疏蔬（魚韻生母）搜廋蒐（尤韻生母）

○頭（侯韻定母）屠途荼圖瘏酴（模韻定母）滁（音不明。涂か塗ならば模韻定母）稌駼徒（模韻定母）投骰（侯韻定母）都（模韻端母）兜（侯韻端母）偸鍮（侯韻透母）腧（侯韻定母）

※京山方言では、遇摂一等端系と魚・虞韻の莊組の字の韻母は、文言音で ou，白話音で u で

あり、文言音が流摂と同じである。

④9「摩麼磨」韻において、果摂一等の字と仮摂二等幇組・見系の字が同韻になっている。見系において両者は別「小韻」である。

例　宮声9摩　○歌（一等開口歌韻）戈（一等合口戈韻）哥（歌韻）鍋渦薖過科（戈韻）柯珂（歌韻）

○加（麻韻二等開口）枷迦（戈韻三等開口・麻韻二等開口）笳（麻韻二等開口）茄（戈韻三等開口・麻韻二等開口）伽（戈韻三等開口）珈葭豭家嘉（麻韻二等開口）佳（蟹摂二等佳韻開口）

（2等麻韻合口の「瓜」・「騧」・「蝸」等の字はこれらとはまた別の「小韻」を形成している。）

しかし、幇組明母の字は1つの「小韻」に合流している現象が見られ、その中に、遇摂・流摂一等明母の字も含まれている例がある。

例　宮声9摩　○摩（戈韻）麻（麻韻）魔（戈韻）蟆（麻韻）……（注15）

商声9麼　○麼（果韻）母（厚韻）馬（馬韻）姥（姥韻）

角声9磨　○謨（模・暮韻）罵禡（禡韻）（注16）

なお、果摂の開口歌韻と戈韻の区別はなく、両者が合流して声母の発音部位により「小韻」が区別されている。

※京山方言では、果摂一等の韻母は-o、仮摂二等開口は-a、見系は-aもしくは-ia、合口は-uaである。2つの摂は主母音が異なっている。

⑤端組・泥組・精組の臻摂合口一等は、曾摂開口一等、梗摂開口二等・臻摂開口（莊組）・深摂（莊組）等と合流している。

例　宮声6沈　○尊（臻合一）曾増憎（曾開一）争（梗開二）臻蓁榛（臻開三）遵（臻合三）繒嶒（曾開一・三）崢（梗開二）矰（曾開一）

○登簦燈（曾開一）敦（臻合一）暾（音不明。暾なら臻合一）憞墩焞（臻合一）

※京山方言では、臻摂一等合口の端系は合口性を失っている。上記4摂の端系・莊組は、みな-ənである。

⑥蟹摂や山摂で開口見系一等と二等の区別の有無が不明瞭である。

例　宮声5孩　○孩（咍韻匣母）骸（皆韻開口匣母）偕（皆韻開口見母）諧（皆韻開口匣母）鞵（佳韻開口匣母）崖（佳韻開口疑母）挨（皆韻開口影母）

しかし　○垓陔該（咍韻見母）荄（咍韻及び皆韻開口見母）

○街（佳韻開口見母）皆喈階稭（皆韻開口見母）揩（皆韻開口溪母）

7田　○邯寒（寒韻匣母）椷鹹咸（咸韻匣母）緘（咸韻見母）含（覃韻匣母）函（覃・咸韻匣母）涵（覃韻匣母）韓（寒韻匣母）

○銜（銜韻匣母）酣（談韻匣母）憨蚶（談韻暁母）

○干竿（寒韻見母）甘（談韻見母）乾（寒韻見母）堪戡（覃韻渓母）看（寒韻渓母）龕（覃韻渓母）姦（刪韻開口見母）奸（寒韻・刪韻開口見母）菅（刪韻開口見母）

しかし　○顔（刪韻開口疑母）間（山韻開口見母）監（銜韻見母）嵌（銜韻渓母）巖（銜韻疑母）嵒碞黠（咸韻疑母）

效摂や宕・江摂では、

8調　○交郊茭膠嘐蛟（肴韻見母）驕（宵韻見母）僑（宵韻群母）嬌（宵韻見母）澆徼僥（蕭韻見母）哮（肴韻暁母）敲骹（肴韻渓母）蹻（宵韻渓・群母）墝磽（肴韻渓母）蹺橇（宵韻渓母）

○高皐膏篙礬橐槹羔餻（豪韻見母）尻（豪韻渓母）

11彊　○彊（陽韻開口群母）羌蜣（陽韻開口渓母）姜疆韁僵薑（陽韻開口見母）

○匡筐劻眶（陽韻合口渓母）腔（江韻渓母）

○光洸（唐韻合口見母）罔（岡の誤りか。岡：唐韻開口見母。）剛（唐韻開口見母）康糠（唐韻開口渓母）網（綱の誤りか。綱：唐韻開口見母。一等開口と合口が一緒になっている。）

しかし　○江（江韻見母）降（降か。降：江韻匣母）杠矼釭扛（江韻見母）缸（江韻匣母）

※京山方言では、蟹摂二等（及び梗摂二等入声）開口見系が口蓋化していない。「該」＝「皆」(平)、「改」＝「解」(上)、「蓋」＝「介」「界」「戒」(去) で、いずれも kai。但し、「佳」は tɕia。他の摂では不定。例えば、「銜」ɕien:xan、「角」ko、「覚」tɕio。

⑦通摂・曽摂合口・梗摂合口・臻摂合口及び江摂の入声字は「徵声」1「篤」韻と12「屈」韻に分かれている。

7の表に見る通り、「篤」韻には端系・知系及び影組（と疑母）の字が、「屈」韻には幇系・見組及び一・二等影組の字が主に属しているが、暁母・心母の字はその限りでなく、また臻摂合口三等の知組・章組字は「屈」韻の方に入っている。

※京山方言では、韻母-u、-y のほか、臻摂合口一等端系と通摂とに、文言音-ou、-iou が見られるが、上記と関連があるであろうか。

⑧山摂三・四等入声の精組において一部に開口と合口の合流した「小韻」が見られた。

徵声2徹　○絶蕝（薛韻合口）屑（屑韻開口）雪（薛韻合口）契褻薛紲媟 渫（薛韻開口）楪

（葉韻以母・怗韻心母）洩泄（薛韻開口）燮躞（怗韻）

※京山方言で、精組三・四等合口字は、山摂入声では開口に発音される。例えば「絶」tɕie。

(3) 声調について

①個別の例外字が見られるけれども、「五声譜」の「宮声」は平声、「商声」は上声、「角声」は去声、「徵声」は入声にあたると考えられる。

②角声（＝去声）所属字にはいくつかの全濁上声字が含まれている。例えば、

角声1洞　「動」「奉」
　　2稚　「是」
　　3魏　「罪」「陛」「髀」
　　4遇　「父」
　　5害　「待」
　　6趁　「盡」「静」「靖」「幸」「憤」
　　7簟　「簟」「善」「誕」「湛」
　　8眺　「道」「浩」「抱」
　　9磨　「罷」
　　12旧　「杜」

③宮声（＝平声）には陰陽調の区別があるのではないか。

この点については、なお、詳細な点検を必要とするが、韻内部の「小韻」の分立状況を見ると、陰陽調が区別されているようでもある。これが正しいとすれば、「五声譜」は表面上は四声体系であるが、実質は五声体系の音を反映していることになる。

例　宮声6沈　（冒頭に次の5つの「小韻」が並んでいる。）

○沈（澄母）成城誠臣（禅母）呈裎程酲陳塵（澄母）承（禅母）懲（澄母）丞（禅母）澄（澄母）琛（徹母）諶（禅母）［おおむね全濁字］

○稱嗔（昌母）蟶頴郴檉（徹母）呻（書母）偁（昌母）竀（徹母）［おおむね次清字］

○征蒸烝脀真（章母）偵（徹・知母）貞楨禎徵（知母）斟（章母）瞋（昌母）珍（知母）縝（徹・昌母）箴針（章母）碪（知母）砭（幇母）砧（知母）煁（禅母）甄（章母）［おおむね全清字］

○身申伸娠深聲升陞昇勝（書母）

○神（船母）宸（禅母）繩乘澠塍（船母）辰（禅母）晨（禅・船母）

7田　（冒頭の3「小韻」である。）

○田鈿闐（定母）寘（賓の誤りか。賓：先韻開口定母）塡（定母）滇（定・端母）畋恬甜（定母）

○天添（透母）

○巔顛（端母）

2遅　○宜儀疑沂嶷（疑母）椸（以母）懿（影母）詛厚貤匜移夷飴詒貽台頤遺宦（以母）黟（影母）圯痍姨彝怡（以母）倪鯢蜺輗霓麑鯢（疑母）［おおむね以・疑母字］

○衣依伊醫咿鷖緊漪（影母）［すべて影母字］

これに対して、「商・角・徵（上・去・入）」声の韻ではこのような対立は見られないようである。

例　商声2菌　○以（以母）蟻螘艤齮儗擬耆（疑母）矣（云母）扆倚苣（影母）迆（以母）薿（疑母）倚（影母）錡（群母）［影・云・以・疑母字が混じっている。］

④10「邪」等の韻の宮（平）・角（去）声に入声字が含まれており、平声に変化しているものが多い。上の4で紹介した通り、「邪」系の韻に入声字が含まれていることを、『読書通』の本文韻目の注において、郝敬自身が述べている。その他の韻にも例えば「軸」字などの例が見られた。なお、これらの文字は、入声にあたる「徵声」の韻にも重複して現れる（下記の例では、それをかっこに入れて示した）。

宮声9摩　「杙」

宮声10邪　「賊」「截」「絶」「或」「活」「畫」（全て「徹」韻に重出。）

宮声12求　「軸」（「篤」韻に重出。）

角声10謝　「跖」（「質」韻に重出。）

上記の例のうち、「杙」は、「徵声」の韻に重出するとすれば、「徹」韻であろうと思われるが、「徹」韻にはこの字が見えないようである。この「摩」韻の「杙」は、テキストでは字形が確かに「杙」なので、先の7の表にも記入しておいたが、もしも「杙」の誤りであれば、「杙」は平声麻韻二等開口澄母の音を持つから、この項には該当しないことになる。

※京山方言（を含む『調査報告』の第1区方言）では、声調は、陰平・陽平・上・去の4声調体系であって、中古全濁上声字は去声に、入声字は陽平に合流している。

9．今後の課題

今回は、方以智らが「郝京山譜」として紹介した資料が郝敬の『読書通』に含まれる「五声譜」である可能性を指摘し、それとともに、郝敬が提出した「羽声」の持つ性格、及び「五声譜」が

反映する音韻的特徴についても、若干の考察を行った。「五声譜」は、文字を各「韻」と「小韻」とにグループ分けするにあたっての音的区別のよりどころにまだ判然としない面が大きい。しかし今回、特にそれが普通話の音系と異なる部分を追ってゆくと、その中に、「郝京山」と称せられた郝氏の本籍地である湖北省京山方言の特徴と一致する特徴も観察された。しかし両者が「一致しない」点もあり、今回はその抽出が不十分であったし、「五声譜」が示すような特徴を有する方言が彼の本籍地の方言に限られるとは軽々に決められないので、今回の作業を踏まえ、各「小韻」の内部を更に仔細に観察しながら、今後より詳しい考察を加えて行く課題が残されている。

更に、文字のグループ分けしかわからない「五声譜」の資料的限界を補う他の資料（たとえば同著者の著作である『毛詩原解』明刊本に付された音注）を参照することなども、研究を助ける効果を及ぼしてくれる作業ではないかと期待している。

【補記】本稿の印刷中に忌浮氏の「明末湖北京山方言音系　—読郝敬《読書通》」（『語言研究』第25巻第４期　2005年12月）を拝読しました。同論文では、「五声譜」は17世紀初葉の湖北京山話であると断言されており、本稿における筆者の作業も、分析の方向として甚だしく間違ってはいなかったという安堵感がありました。同論文が記述する「五声譜」の音韻特徴は、内容が本稿の８と多く重複しており、本稿よりも、音韻史上の現象を踏まえた的確な叙述で語られていると思います。また、京山方言と「五声譜」の入声字の分韻については本稿のなしえなかった詳細な比較が行われています。しかし今回、本稿は、同論文を参照した結果を反映させるように本文の内容を改めることがもはやできませんでしたので、次第をここに明記いたします。

注

1　1611-1671

2　崇禎14年（1641）成書。

3　以下、漢籍からの文章の引用や中国語の書名・論文題目、例字などの表記にあたっては、一部の文字の字体を常用漢字の字体に改めた。

4　同書 p.256（第五章 明清等韵学音系举要　第五节　见于古今著录的部分明清等韵著作）

5　『明清等韻学通論』p.205によると、作者是奎は江蘇武進の人で、同書は1716年以前の成立であるという。

6　『湖北文徴』（2000.湖北人民出版社）所収。

7　『山草堂集』所収。

8　p.20

9　『中国叢書綜録』によれば同叢書は鈔本の形式で伝わっていることになるが、「四庫全書存目叢書」に

収録されている「毛氏原解」は「明万暦四十三年至四十七年郝千秋郝千石刻郝氏九経解本」である。

10 『尊経閣文庫漢籍分類目録』p.800・p.842。「雑部」の「合編合刻類」に著録されている。書誌的情報は「闕本　明郝敬　明版　十三冊」とある。

11 『読書通』本文の「徵声」の韻目に付された注は、それぞれ「三虢　與徹通」、「四月　與徹通」、「五黒　與徹通」、「七鐵　與二徹通」、「八滌　與二徹通」、「十褻　與甲通」であって、「八滌」と「十褻」について、「五声譜」の注と内容が異なっている。なお、『読書通』本文の韻目は「五声譜」のそれに一致しているが、「宮声」の11番目の韻の名が、「五声譜」では「彊」であるのに対し、『読書通』の本文では「強」字になっている。

12 以下、本稿で中古音を参照する場合は、『広韻』及び『集韻』の登録する音に従う。

13 個々の箇条の下に、※を以て表示する。本稿で「京山方言」とするものは、全て『湖北方言調査報告』(「分地報告」七「京山」) に従っている。

14 「五声譜」では、精組・見系細音の合流はなさそうである。疑わしい例は「徵声」12「屈」韻の「○邮 (心母) 侐洫 (暁母)」の「小韻」であるが、これについては本文の6で紹介した。

15 以下、この「小韻」は、「婆」・「波」・「坡」等の幇母・滂母・並母の字と「○」で区切られることなく連続している。

16 韻目になっている「磨」字は「磨」韻の冒頭で、「破」(滂母)、「箇」・「个」(見母)、「播」(幇母) とともに1つの「小韻」を形成していて、声母の種類からは理解に苦しむ。

本文引用文献

郝敬『山草堂集』(尊経閣文庫所蔵)

侯外廬主編『方以智全書』第1冊・第2冊「通雅　上・下」1988上海古籍出版社

方中履『古今釈疑』広陵古籍刻印社刊

　方中履『古今釈疑』(「授書随筆」) 1971台湾学生書局

耿振生『明清等韻学通論』1992語文出版社

村上吉広「『毛詩原解』序説」1987『詩経研究』12

蒋秋華「郝敬的詩経学」1998中央研究院中国文哲研究所編『中国文哲研究集刊』第十二期

趙元任等『湖北方言調査報告』(1938年序　中央研究院語言研究所専刊)

・財団法人前田育徳会のご厚意により、本稿に今回調査対象とした同文庫所蔵『山草堂集』所収『読書通』の一部分の版面の写真 (図版1・2) を掲載する許可を得ました。ここに謹んで感謝致します。

・筆者は本稿執筆に先立ち、2005年12月17日に山口大学人文学部において開催された「2005年度山口中国学会大会」において、「明・郝敬『読書通』所載の「五声譜」について」と題する口頭発表を行いました。本稿の内容は、同発表の内容を骨子として若干の修正を加えたものです。学会の席上、ご質問・ご意見を下さった先生方に感謝致します。

・なお、本稿は、「平成17年度科学研究費補助金　基盤研究 (C) 郝敬の音韻研究について－『毛詩原解』の音注を中心とした研究－」に関連する研究成果の一つであります。